フォス新聞 ── ドイツ語圏最初の教養新聞 ──（その1）

鈴 木 将 史

序

ドイツ人の新聞好きは，われわれ日本人と並びつとに有名である。単独紙個別の発行部数は日本の全国紙に遠く及ばぬものの，主要紙410紙を数え，その他もろもろのローカル紙を含めると，総発行部数約3,000万になんなんとする[1] ドイツの新聞状況は，その人口比を鑑みれば，日本と比較してもほとんど遜色がない（日本は1997年現在で5,377万の新聞総発行部数を誇るが，主要紙と目される日刊新聞は122紙しか報告されていない[2]。因みに同年の報告では，人口1,000人当りの主要新聞販売部数は日本が575部で第1位であり，ドイツは317部で321部のイギリスに次いで世界第3位である[3]）。しかし，そういった数字面での差異よりも，われわれの注意をより強く喚起するものは，ドイツ有力紙の編集方針であろう。写真やイラストといった視覚的メディアに日本紙ほど頼らず，専ら文章で，それも技巧的な文体を駆使して作り上げる紙面は，ドイツに限らずヨーロッパの所謂「クオリティー・ペーパー」の大きな特徴であるが，加えてドイツ紙は，文芸・教養記事に従来から大きなウェイトを置いてきたことに定評がある。わが国の文芸評論家は，専ら単行本や専門誌の論文執筆を通じて評論活動を展開するのが常である

---

[1]「事典　現代のドイツ」，大修館書店，1998　482頁。
[2]「第48回日本統計年鑑　第21章―3　都道府県別新聞発行部数」，総務庁統計局，1999。
[3] Microsoft Encarta 98 „Zeitung“

が，ドイツの評論家達に対する社会的評価には，それに加えて，新聞の文芸欄での執筆活動も少なからず影響する。更には，20世紀初頭における„Berliner Tageblatt“のA.ケルや„Berliner Börsen-Courier“のH.イェーリンクに始まり，現代においては„Frankfurter Allgemeine Zeitung“のM.ライヒ-ラニッキ或いは„Süddeutsche Zeitung“のJ.カイザーに至るまで，有力紙文芸欄の編集に携わることが評論家としての名声を勝ち得る有効な手段であることには，今も昔も変わりはない。このようなドイツ紙に息づく教養記事重視の伝統は，新聞発行の黎明期にその源を求め得るが，わけてもドイツ最古の新聞のひとつである『フォス新聞』の存在を抜きにして，この伝統を辿ることは出来まい。小論では，この230年間(その大本からたどれば317年間）に亙り発行され続けたドイツ屈指の名門紙『フォス新聞』の変遷について，文芸欄に軸足をおきつつ検証を試みる。

ベルリン最初の新聞から『フォス新聞』の誕生まで

1450年頃グーテンベルクにより活版印刷術が発明されて以来，ヨーロッパは印刷書籍の大量発行・流通時代に突入する。だが，奇妙なことに，印刷新聞の発行はそれより1世紀半も遅れ，17世紀の声を聞かなければならなかった。これは，新聞発行に関しては，ハードウエアの整備にソフトウエアがまだ追いついていなかったことを示す結果である。即ち，新聞の執筆者層—ジャーナリズムが，まがりなりともヨーロッパに形成されるまでには，印刷技術の開発から更に200年近くの年月が必要とされたのだった。それまでは，たとえ大量印刷が可能であろうとも，報道すべき情報を一般市民が入手することは不可能に近かった。よその地域の情報を知るべく諸国を巡ることなど，彼らにはどだい叶わぬ話で，それが可能な者は政府の役人か，そうでなければ大道芸人やジプシーなど言論文化とは無縁な「名誉なき人々」に限られていたのである。従って，社会の情報は時の政府－宮廷が一手に掌握していたため，それらを民衆に知らしめるためには，「触れ書き」を回すだけで充分であり，「新聞」などという馬鹿丁寧な伝達手段の必要性は，まるで唱え

られなかったのが実情である。また当時，ジャーナリズムを本来担うべき文化人達の間では，新聞というメディアを，基本的に世論操作の道具として忌避する傾向も見られた[4]。事実ごく初期の印刷新聞にも「広報」的な色彩は色濃く残り，民間の手による以上に，役人が発行した新聞の方が重きをなしている。

ドイツは世界でも最も早く印刷新聞を発行した地域である。一般的には，1609年にブラウンシュヴァイク近郊のヴォルフェンビュッテルで発行された『通知新聞』（„Avisa Relation oder Zeitung“）が世界最初の週間新聞とされている[5]（1605年にシュトラスブルクで出された „Relation“ を嚆矢とする説もある[6]）。他の主要国に先立つこと10年以上である点をみても（イギリス1621年，フランス1631年，イタリア1643年，スカンジナビア1644年），ドイツの新聞発行における先進性を伺えよう。また，フォス新聞を生み出したベルリンにあっては，その8年後の1617年には既に最初の週間新聞（週3回発行）が確認されている。この新聞は，ブランデンブルク選候帝宮廷の使節長（„Botenmeister“）が業務上見聞した各地の事件を報告したもので，特定の名称を冠されていたわけではないが，当時の使節長クリストフ・フリッシュマンの名を取り，『フリッシュマン新聞』（„Frischmann-Zeitung“）と呼

---

[4] Heiz-Dietrich Fischer: Die Zeitung als Forschungsproblem, S. 11, in: H.-D. F. (Hrsg.), Deutsche Zeitungen des 17.bis 20. Jahrhunderts (Publizistik-historische Beiträge Bd. 2), Pullach b. München 1972, S. 11-24.

[5] Peter de Mendelssohn: Zeitungsstadt Berlin, Berlin 1959, S. 16/17.

[6] „Zeitung“ という概念は，新聞学でも様々な定義が試みられている。中でも，ドヴィファートが唱えた「新聞は，最新の時事を最短周期で最大範囲の公衆に伝達する」という定義と，ハーゲマンが挙げた新聞の本質的10大特徴―公開性，時局性，公共利害性，定期性，継続性，共同作業性，多様性，機械的量産性，企業事業性そして「組織としての新聞」―が有力なものであろう。ただ，これらの諸要素を完備した真の新聞が登場するのは，勿論後代になってからであり，初期における定期刊行物が，どの要素をもって新聞と認知され得るかは，解釈により若干のぶれが生じるのも致し方がない。／Emil Dovifat: Zeitungslehre, Bd. 1, Berlin 1962 (Sammlung Göschen Bd. 1039), S. 7-16./Walter Hagemann: Die Zeitung als Organismus, Heidelberg 1950, S. 15.

ばれている(図版Ⅰ参照)。従ってベルリンにおける新聞発行の礎も，官の主導により置かれたことになる(『通知新聞』にしても，ブラウンシュヴァイク－リューネブルク宮廷の官報的色彩が濃いものだった)。当時のドイツにおける出版文化の拠点都市は，フランクフルト，ハンブルク，ライプチヒなどであり，人口4,000人足らずのベルリンは，規模的にもこれら大都市に遠く及ばぬ一中都市であったが，最初の印刷新聞発行年となると，1615年のフランクフルト („Frankfurter-Zeitung"[7]) や，1618年のハンブルク („Wöchentliche

No. 36.

Auß Görtz/vom 16. Augusti. Anno 1617.

Vnser Capitän *Paradeis*, hat mit seinen vntergebenen Soldaten/die eine Schantze/ so allernechst am Thiergarten/ oberhalb der Jßmis gelegen/ gestürmet vnnd angelauffen: Dieselbe auch glücklichen erobert vnd eindekommen/vnd alles was darinnen gewesen/ niedergehawen: Von den vier Capitäinen/ welche in solcher Schantze sich befunden/ seindt zwene gefangen worden/einer ist mit vmbkommen/ vnnd der vierdte entrunnen. Von den vnsern seind sechs Knechte todt blieben.

Freytags nach mittage/seind auß der Thobor zu St. Florian/ etliche Griechen entsprungen/welche sich alsbaldt bey Herrn *Don Balthasarn*, vnnd Herrn Graffen Dampier eingestellet/Mit erbietung/Thabor/ durch eine *Practic*, die sie erdacht/in jhre gewalt zuliefern/welches beyde Herrn/den Griechen geglaubt/mit dem Volck auffgezogen/vnnd vermeint/ sie hetten bereyt den Schlüssel im jhrer Handt. Als sie aber vor Thabor kommen/vnnd dasselbe Ort/jedoch von weiten vmbringet/ hat *Don Balthasar* seinen Griechischen Dollmetscher/ vnter die Mawren geschicket/mit den Griechen zu *parlamentiren*, Woräuff aber dieselben alsbaldt angefangen/ vnder vnser Volck zuschiessen: Also/ das die vnsern wieder leer anheimb ziehen müssen/worüber gedachter Dollmetscher/durch einen Schenckel/vnd ein Roß gar todt geschossen worden.

図版Ⅰ　"Frischmann-Zeitung"

[7] この新聞は，20世紀初頭期にフォス新聞のライバル紙であった同名の有力紙とは別系統であり，独自に „Frankfurter Journal" として1903年まで存続した。単独の形態を守りつづけた新聞としては，恐らくドイツで最も長期間に亙って発行され続けた新聞であろう。

Zeitung auß mehrerley örther“）にほぼ肩を並べ[8]，1650年のライプチヒ（„Einkommende Zeitung“[9]）には大きく先んじるなど，後の「新聞都市」ベルリンの面目を，早くも大いに施しているのである[10]。

さて，1618年にクリストフ・フリッシュマンが亡くなると，その弟ヴァイトが兄の役職と共に新聞発行業を引き継ぐが，新聞を印刷していた当時のベルリン唯一の印刷業者ゲオルク・ルンゲが1655年には当局より新聞発行認可を獲得し，61年のヴァイトの他界に伴ってその新聞の発行者となった[11]。初期の印刷新聞は，民間では印刷業者や書籍業者の発行によるものが常だったが，『フリッシュマン新聞』もこの時点でついに官から民へと経営形態を移行させるのである。もっとも，28年から導入された新聞検閲により，民営化されたとはいうものの，紙面（主に外国からの報道記事を中心に構成）が殊更変化したわけではない。ルンゲ家の許，新聞は『ベルリン外事普通郵便新聞』（„Berlinische Einkommende Ordinari und Postzeitungen“；„Oridinari“は「号外」［„Extra-Ordinari“］に対する「通常」の，„Einkommende“とは，「外部から流入してくる」の意）と命名され，以降ゲオルクの息子クリストフ，そしてその妻カタリーナと所有者が変遷し発行され続けた。2度の結婚（クリストフの死後，カタリーナは再婚したが，第2の夫にも先立たれた）にも

---

[8] Walter Böning: Deutsche Presse. Bd. 1. Hamburg, Stuttgart-Bad Cannstatt 1996, S. 15.

[9] ただこの新聞は，当時は週間新聞として週3回が通例であった発行状況の中，日刊として発行された点に画期的な意味を持つ。

[10] しかも，『フリッシュマン新聞』の創刊年は，更に早まる可能性さえある。この新聞の現存する最も古い版は1617年8月16日付の36号であり，それ以前の発行状況は解明されていないからである。／de Mendelssohn, S. 16.

[11] ルンゲは新聞発行を，実質的には1655年に引き継いだとされているが，単にそれ以前の新聞資料が存在しないためだけであって（37年から54年まで欠損），その間の引き継ぎがどのような実態であったのかは，K. ベンダーやP.d. メンデルスゾーンの「ルンゲは老齢のため新聞経営を死亡する数年前から印刷業者に譲り，自らは名目的発行人を務めていたのではないか」といった推論の域を出ない。／Klaus Bender: Vossische Zeitung, S. 27, in: Heinz-Dieter Fischer (Hrsg.), Deutsche Zeitungen des 17. bis 20. Jahrhunderts./de Mendelssohn, S. 20/22.

関わらず子供を授からなかったため，1704年彼女は自らの印刷所共々新聞の発行権を，印刷業者ヨハン・ローレンツに売却した。

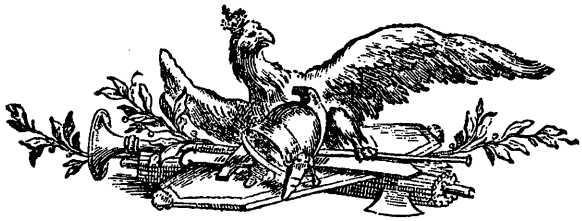
ここで，発行認可により独占的にベルリン新聞業界を支配してきた『フリッシュマン新聞』の状況は一新し，新たな競争時代へと突入することになる。なぜなら，その10年前にヴェルトハイムから移ってきた書籍・印刷業者ヨハン・ミヒャエル・リューディガーがやはりこの年に新聞発行認可の交付を受け，有力なライバルとして新聞発行にも乗り出してきたからである[12]。リューディガーは，ローレンツによる異議申し立てにより発行認可をその2年後に取り消された後も，再認可を得るべく当局へなりふり構わぬ接近を図り，とうとう1721年，その息子ヨハン・アンドレアスがローレンツから念願の認可を奪い取ることに成功する。ローレンツの『ベルリン普通新聞』(„Berlinische ordinaire Zeitung“：彼は1712年頃から自分の新聞をこう命名していた）は早速同年2月22日付23号で発行停止に追い込まれるが，早くもその3日後には発行人をヨハン・アンドレアスに変えた同体裁の新聞が，24号から発行を継続する。この時点では，内容的にもヨハン・アンドレアスの新聞はさしたる変化を見せなかったが，その名を『ベルリン認可新聞』(„Berlinische privilegirte Zeitung“）と改名し，ひとまず1740年までは再び唯一の認可紙としてベルリン新聞業界を独占するのである[13]（図版II参照)。

このローレンツからリューディガーへの発行者の交替は，単に経営者の変更のみならず，新聞そのものの変質を意味していた。交替時の紙面は，『フリッシュマン新聞』から伝統的に受け継がれてきた，外国事件をごく客観的に報道する姿勢からほとんど抜け出ておらず，そのニュースソースもハンブルクやウィーンやライプチヒの新聞からの受け売りが大勢を占めていた（カタリーナがローレンツに新聞を売却した理由としても，先に述べた点以外に，

---

[12] この新聞は『リューディガー新聞』と呼ばれ，1704年から2年間発行された。

[13] 『フォス新聞』は，正式名を持たぬ『フリッシュマン新聞』以降，最終的な『フォス新聞』に至るまで，実に26回もその正式名称を変更している。／Bender, S25.



Berlinische privilegirte Zeitung.

1stes Stück. Donnerstag, den 1 Januarius 1761.

Dir, die du von dem Olymp Germaniens Thränen erblickest,
Dir, Gottheit, weihn wir den ersten Gesang!
Beym frohen Anbruch des Jahrs, mit dem du uns heute beglückest,
Sey unsre erste Empfindung der Dank!

Dein Zorn, durch Frevel gereizt, goß Schaalen voll schrecklicher Plagen
Auf Deutschlands sündge Bewohner herab!
Es manche rauchende Stadt erschallte von ängstlichen Klagen,
Und Schwerdter stürzten die Edeln ins Grab!

Auch du, geliebtes Berlin, sahst wie sich die Feinde dir nahten,
Sahst deine Mauren von Flammen bedroht!
Dich schreckt Siberiens Heer, Pannoniens und der Sarmaten — —
Du betest — plötzlich verschwindet die Noth!

Dein Schutzgott eilet herbey — schnell flieht das wilde Getümmel!
Mit ihm entfernt sich der wütende Krieg!
Die Ruhe labet dich jetzt; o danke die Rettung dem Himmel!
Dank ihm den neulich verliehenen Sieg!

Dich, Gottheit, flehen wir an, laß endlich die Schwerdter ermüden!
Deck uns mit deiner verschonenden Hand!
Verleih uns Tugend, und gib den schmachtenden Völkern den Frieden!
Seegne den König, Sein Heer, und Sein Land!

Berlin, vom 1 Januarius.

Bey dem Golzischen Infanterieregimente sind die Capitains, Herren von Forcade und von Apenburg, zu Majors avancirt.

Hubertsburg, vom 12 Dec.

Der Lauf der Posten von Leipzig nach Dresden ist nun wieder offen. Die Kays. Königl. Armee, deren Hauptquartier diesen Winter über zu Dresden bleibet,

図版II "Berlinische privilegirte Zeitung"

紙質の低下を読者から批判されたという事実が挙げられる)。このような編集姿勢がリューディガー以降，徐々に編集部の（特に福音派傾向紙としての）主体性を打ち出す路線へと切り替わり，後の当局による検閲との苛烈な衝突をもたらすのである。1751年にリューディガーが亡くなると，その遺言により新聞は，彼の実の息子達ではなく，殊の外彼にその経営能力を高く評価されていた娘婿の書籍商クリスチャン・フリードリヒ・フォス（大フォス）に

委譲された。フリッシュマン―ルンゲ―ローレンツ―リューディガーと1世紀半近くもの間様々な発行者の手を，それに応じた名を帯び経てきたこの新聞は，ここでついにフォス家という恒常的な社主を迎え，『フォス新聞』の愛称のもと，以降200年近くもベルリンで発行され続ける（しかし，新聞の名称は，フォスのもとでも依然『国王認可ベルリン新聞』のままで，『フォス新聞』が正式名となるのは1911年になってからである[14]）。20世紀初頭にさえ，ベルリンのジャーナリズムを代表した『フォス新聞』は，従って遠くベルリン最初の印刷新聞にまで連なる正に名門中の名門新聞なのである。

ちなみに，『フォス新聞』の開始をいつに置くかという問題になると，必然的に大フォスが新聞発行権を得た1751年という時期が適当か，さもなければ過去に大きく遡ることになろう。『フォス新聞』自身は，親族J.M.リューディガーを創始者と位置付け，新聞発行許可が当局から彼に与えられた1704年を社業の開始年とみなしていた[15]。確かにこの年にローレンツがカタリーナから新聞を譲り受け，『フォス新聞』へと直結する『ベルリン普通新聞』の発行を開始するのも確かなのだが，後世の『フォス新聞』にとってこの事件は問題とされず，あくまでリューディガーが新聞の創設者だったのである。こうした扱いの原因としては，『フォス新聞』が，遥か中世へと連なる自らの系譜を把握し切れていなかったのか，或いは意図的なものだったのかは明らかではないが，少なくとも，長年に亙り発行権を巡って諍い続けたローレンツを，『フォス新聞史』の系譜の中に組み入れることを潔しとしなかったのは事実だろう[16]。この後新聞は，1790年に大フォスから同名の息子（小フォス）へ，そ

---

[14] 初期のドイツ紙は，発行者の名を冠して愛称で呼ばれることが通例であった。『フォス新聞』はその愛称が長年の間に正式名となってしまった稀な例である。／de Mendelssohn, S. 25.

[15] 1904年に『フォス新聞』は創業200周年を記念して，フォリオ判350頁に及ぶ大部の社史を編纂している。／Arend Buchholtz: Vossische Zeitung. Geschichtliche Rückblicke auf drei Jahrhunderte, Berlin 1904.

[16] 200周年記念誌において，ルンゲ家からローレンツが引き継いだ時点での新聞は，「当局の見立てによれば，18世紀初頭の諸新聞のうち，最低の部類に属して

してその5年後には両フォスの死去に伴い，小フォスの妹マリー・フリーデリケ・レッシングへと委譲された。それ以降，33年間に亙り彼女はフォス新聞を経営し，同紙を不動の有力紙に育て上げたのである。

マリー・フリーデリケが新聞を譲り受けた時点で，ベルリンのジャーナリズムは，もはやフォス1紙が独占する時代ではなくなっていた。既に若干触れたが，啓蒙君主フリードリヒII世（大王）が即位すると，寡占化された報道業界を疎む彼は，すぐさまフォスに対抗する新聞を作るべく，書籍商A.ホーデに新聞発行認可を与え，1740年ベルリン第二の新聞『ベルリン政治教養新報』（„Berlinische Nachrichten von Staats-und gelehrten Sachen“）が発刊するからである。この新聞は，48年のJ.K.シュペナーによる買収の後，『シュペナー新聞』と呼ばれ，1874年まで発行され続けるが，その間ベルリンの両紙は，「フォス小母さん」（„Tante Voss“），「シュペナー小父さん」（„Onkel Spener“）の愛称のもと格好のライバル紙として発展した。

ここで我々は，『シュペナー新聞』の正式名に登場した「教養」（„gelehrt“）という文言に注目しなければならない。教養記事は，ドイツ紙伝統の分野であり，1700年代初頭から政治記事と並んで紙面の重要な構成要素となった。„Staats und gelehrt“を題名に戴く最初のドイツ紙は，1712年に創刊されたハンブルクの„Staats und gelehrte Zeitung des Hamburgischen Unpartheyischen Correspondenten“[17]であり，40年のシュペナー新聞の創刊，そし

いた」と述べられ，その状況を打開した「救世主」が，ヨハン・ミヒャエル・リューディガーであると断じ，記念誌を彼に捧げるかの如く手放しで賛美している。しかし，彼が実際に新聞を発行した期間は，上述した通り2年間に過ぎないし，その新聞も現存してはいない。実質的に新聞を改革したのはその息子ヨハン・アンドレアスであり，それもようやく1740年になってからで，つまりは創刊された競争紙に対抗するためである。いずれにせよ，1704年の8月にローレンツが「独占的」な新聞発行認可を受けたにも拘わらず，10月にはリューディガーも発行認可を獲得したという事態は，詳細は今に伝わっていないが，当時の当局内での混乱振りを物語るものだろう。／ibid. S. 5-15.

[17] 1731年よりこの名となる。創刊当時の紙名は，„Der Hollsteinische unpartheyische Correspondente Durch Europa und andere Teile der Welt“/Böning, S.

て51年には『フォス新聞』が„Berlinische privilegirte Staats-und gelehrte Zeitung“と改名されることにより，ドイツ紙における教養記事・文芸欄分野は確立した感がある。当時の『フォス新聞』は4面構成に過ぎなかったが，1・2面の政治・社会欄（ベルリン圏外からの記事が大部分）に続いて3面を文芸欄が占めていた（4面は広告欄）[18]。それ以来，インテリ層に焦点を合わせた「教養紙」には，上質な文芸欄が不可欠であるという伝統がドイツでは早々に形成され，今日に至っているのである[19]。

『フォス新聞』文芸欄の発展

上述の如く，文芸欄に少なからず重きを置くドイツ紙のなかにあっても，『フォス新聞』のそれは当初から特筆に価する質を誇っていた。それには，1748年から編集に参画したクリストローブ・ミュリウス並びに．ゴットホルト・エフライム・レッシングの功績が大きい。『フォス新聞』編集者として最初に確認し得る[20]ミュリウス(1722—1754)は新教の牧師の五男としてライプチヒに生まれ，レッシングとは母方の義理の従兄にあたる（ミュリウスの父の死別した先妻の甥がレッシング)。ライプチヒ大学在学中に「ドイツ文壇の教皇」と異名を取ったゴットシェトの弟子となり，ゴットシェト発行の雑誌で彼のゴーストライターを務めることもあった。しかし，直に自らも，痛烈な社会風刺を身上としたスキャンダラスな雑誌を次々と創刊し，一躍時代の風雲児として言論界の注目を浴び始める。48年に『フォス新聞』へ招聘された後，彼は特に書評に格段の充実を図り，同年引き続いてライプチヒ大の後輩でもあった19歳の青年レッシングをJ.A.リューディガーに紹介し，編集を手伝

177.

18 参照したフォス新聞は，1761年1月1日のもの。

19 Susanne Knoche: Der Publizist Karl Philipp Moritz (Bochumer Schriften zur deutschen Literatur Bd. 52), Frankfurt a. M. 1999, S. 36ff.

20 それ以前の『フォス新聞』編集者は，文献上に名を残していない。／Buchholz, S. 31.

わせた。

ミュリウスは文芸欄担当編集者としては，全く型破りな程の辛辣な批評を得意としたが，その最たるものは，49年彼が『フォス新聞』編集の傍らに発行した週刊ゴシップ誌『預言者』（„Wahrsager“）である。ベルリン各界のスキャンダルを暴きまくったこの雑誌は，当然の如く当局から発行禁止命令が下り，５ヶ月後には早くも廃刊の憂き目を見るが，『フォス新聞』での仕事よりもこの雑誌にこそ彼の特性が現れていると見なせよう。彼は，生来が反骨的且つ探求心旺盛な「目立ちたがり屋」であり，その興味の対象は，人文科学もさることながら，更に自然科学へと向けられていた。いわば彼は，人文科学的素養も備えた博物学者であり，現代でいう「科学ジャーナリスト」の先駆けといえよう。事実，彼は『フォス新聞』に招聘される半年前に，ベルリン科学アカデミーにより，同地の金環食観測会へと招待され，その際に数学者オイラーと知己を得，後には彼の助力で当時は珍しい科学雑誌の発行も手掛けている。後年彼は，新世界アメリカ大陸への探検旅行を計画し，スポンサーも見つけ決行に移すばかりの段階で，熱病に倒れ急逝したのであった。従って，ミュリウスの『フォス新聞』での２年間（48年末から50年末）の仕事は，彼にとっては生活手段のための副次的な業務に過ぎなかったのだが，彼の登場により，書評・劇評を含めた人文・自然科学両面に関する文芸欄が毎号掲載されるようになり，レッシングの継承を経て近現代に至るまで『フォス新聞』独自の名声の確立に大きく寄与する結果となった。

もっとも，ドイツ文学史におけるミュリウス最大の業績は，何といってもレッシングのベルリン文壇デビューを，新聞編集者として支援したことだろう。„Die alte Jungfer“ など，レッシングの初期作品のいくつかは『フォス新聞』の印刷所から発行され，ミュリウスの紙上での賞賛が作品の注目度を高めた点は事実である[21]。

---

[21] Dieter Hildebrandt: Christlob Mylius. Ein Genie des Ärgernisses (Preußische Köpfe 5), Berlin 1981.

ミュリウスが，その性格故，リューディガーと不仲になり，50年末『フォス新聞』文芸欄の編集から撤退した後，後任は若きレッシングに委ねられた[22]。彼にとってもしかし，新聞編集は糊口をしのぐ便法の域を出るわけではなかった。おりしも新聞は，リューディガーからフォスの手に移る時期にあたり，フォスはレッシングに，文芸欄のみならず政治経済記事も含めた紙面全体の編集を打診したが，彼には「その様な政治的小事に自分の時間を浪費する気」[23]もなく，文芸欄担当のみを55年まで継続する。とはいえ，彼の手によりほぼ毎号掲載された文芸批評は，その明快で決然とした評価態度において他紙の追随を許さず，更には翌51年より毎月文芸特集別刷『機知の国便り』(„Das Neueste aus dem Reiche des Witzes“) を執筆するなど，『フォス新聞』の枠を超えて，レッシングの出現により，ドイツ紙における文化ジャーナリズムの下地が形成されたといっても過言ではあるまい。ゴットシェトを一顧だにせず，ゲレルトの書簡を真摯に賞賛し，クロプシュトックとハラーには心からの敬意を表し，独文学に対する英仏文学の優位性を認めはするが，その度を越した美化礼賛には鋭い警鐘を鳴らした彼の批評態度を，19世紀後半に同紙の編集を手掛け，また著名な詩人でもあったヘルマン・クレトケは，「『フォス新聞』全期を通じて最も貴重なものは，レッシングの残した遺産である」[24]と評したのも頷けよう。また，彼の弟カール・ゴットヘルフは，兄以上に『フォス新聞』との関係が深く，先に紹介した小フォスの妹マリー・フリーデリケがレッシング姓を名乗るのも，兄同様新聞編集に参画したカールと結婚したからである。マリーの後はフォス家の親族としてレッ

---

[22] ミュリウスとリューディガーの仲違いの真相は詳らかではないが，レッシングの書簡によると，リューディガーがフォスに委ねた手紙を，ミュリウスが開封したとしてリュディガーが立腹したことに端を発するらしい。レッシングはその際リューディガーを「疑り深い男」と断じて従兄の肩を持っている。／G. E. Lessing: Werke und Briefe Bd.II/I Briefe von und an Lessing 1743-1770, Frankfurt a. M. 1987, S. 26/27.

[23] ibid. S. 31.

[24] Die Vossische Zeitung. Ein Rückblick, in: Vossische Zeitung, 1872 Nr. 45.

シング家が新聞経営者となるため，その点も踏まえると，G.E. レッシングは名実共に『フォス新聞』文芸欄の原点であった。

1755年にレッシングが新聞編集者の任を離れた後，弟カールや「ドイツのホラチウス」カール・P. ラムラーなど数人の編集者が入れ替わりながら文芸欄の掲載は続いたが，30年程を経た後に登場するカール・フィリップ・モーリッツの許で，文芸欄は再び興隆期を迎える。

その短い生涯の内に驚くべき文学的業績を残し，深い心理描写を随所に織り込んだ自伝的小説『アントン・ライザー』によって現代も尚注目を浴び続けるモーリッツ (1756—1793) は，奇しくも1781年のレッシングの死去に手向けた哀悼詩『レッシングの死にあたって』が『フォス新聞』の書評欄に取り上げられたのが契機となり，同紙に寄稿を開始する。84年から85年にかけて彼は同紙全般の責任編集者となり，文芸欄の比重を更に高め，それまでの新聞の正式名称 „Berlinische privilegirte Staats- und gelehrte Zeitung“ を『シュペナー新聞』同様の後半部を持つ „Königlich privilegirte Berlinische Zeitung von Staats- und gelehrten Sachen“ と改めた。この名称は „Vossische Zeitung“ という正式名称にとって代わられる1911年まで継承される。モーリッツが『フォス新聞』に果たした最大の功績は，客観的な事実報道に，より踏み込んだ報道者の見解を添えることに腐心した点であり，この傾向は文芸欄において一層鮮明に現れた。その際，自らの芸術観を唯一の拠り所とした彼の批評態度は，従来からの『フォス新聞』の伝統を踏襲したものだが，彼は「新聞」という公器に通常の書籍とは異なる啓蒙的使命を強く認め，公刊される評論にはない一般性や教育性を文芸欄に盛り込もうと努力した。彼が語りかけようとした対象は，従って「全民衆」であり，その点で教養層に焦点を絞ったミュリウスやレッシングの評論とは趣を異にする。自らも，彼らとは違い新聞発行に天命を感じていた彼は，

> 「人々が今までこれほど啓蒙について言及し，且つ書き記してきたにも関わらず，それを実行に移すために，新聞という極めて単純な手段に思い至らなかったとは，誠に驚嘆する他はない。」[25]

と言明し，ペスタロッチを師と仰ぎつつ，『フォス新聞』を真の「教養紙」に変革しようと試みた。ただ，その1年後には，第一に大規模報道メディアである新聞が，自らの理想実現にはそぐわぬことを早々に察し，その編集から手を引くことになる。これ以降，彼はより自らの意向を反映させやすい雑誌編集へと傾倒していった。彼の『フォス新聞』への寄稿さえ，1786年が最後となるため，正に彼は『フォス新聞』紙上を駆け抜けていったというに等しい。だが，彼の手により，教養文化，とりわけ書籍や演劇が一般大衆に一層身近な分野として慣れ親しまれたことを鑑みると，ドイツ紙における „Feuilleton“ の伝統は，（通常レッシングの評論活動をその先駆けと見る向きが強いが）モーリッツによって大衆に植え付けられたとも考えられよう。

レッシング—モーリッツと続く伝統の内に『フォス新聞』文芸欄の書評・劇評は舌鋒をますます研ぎ澄まし，18世紀世紀転換期には国立劇場監督A. W. イフラントと激しく衝突したりもするが[26]，新聞そのものはこの時期，ヨハン・フリードリヒ・ウンガー（1754—1782）の指導のもと，飛躍的な発展を遂げた。ウンガーは富裕な印刷業者で，ベルリンに第三の新聞を作ろうと認可獲得に奔走するが失敗し，しからばと資金不足に陥っていたマリー・フリーデリケ・レッシングに援助を申し出，1802年『フォス新聞』の共同発行人に納まるのである。彼は編集そのものを手掛けることはなかったが，新聞経営に抜群の才覚を示し，さまざまな改変（経済欄や広告欄の充実，紙面の拡大，価格の据え置きなど）を通じて『フォス新聞』をドイツ有数の大新聞に育て上げた。残念ながらウンガーは在任2年にして1804年に世を去り，新

---

[25] Karl Philipp Moritz: Ideal einer vollkommnen Zeitung, 1784 Berlin. In: Moritz, Werke Bd. III Frankfurt a. M. 1981, S. 173./Knoche, S. 124-147.

[26] 1813年，かねてから『フォス新聞』劇評の検閲強化を当局に働きかけていたイフラントは，王立劇場公演に対する劇評はあまねく，初演を含めて最低3度の公演を経なければ発表してはならないという法律を提案した。一見突飛に見えるこの提案もしかし，28年には正式に立法化される。このエピソードは，厳格を極めた当時の検閲を物語るが，『フォス新聞』がこの時期，より文芸欄に労力を傾注した一因ともなっている。／Buchholz, S. 65/66.

聞は再びM.F.レッシングの単独所有となる。この後新聞はめまぐるしく編集者が交代する中，マリーの息子クリスティアン・フリードリヒ，そしてその甥カール・ロベルトへと引き継がれ，1910年までレッシング家が所有した。

『フォス新聞』と『シュペナー新聞』が2大紙として君臨する19世紀初頭のベルリン新聞界は，また当局による苛酷な検閲制度がしかれた時代でもあった。ナポレオン戦争の敗北により，陰鬱な雰囲気に満たされたフリードリヒ・ヴィルヘルムIII世の治世下では，先々王フリードリヒ大王の時代とは打って変わって，紙上での国内政治報道並びにそれに対するコメントは厳しく統制された。いきおい，新聞の軸足は教養記事にシフトされざるを得ないが，『フォス新聞』においてこの方針修正は成功裡に行なわれ，1823年の演劇評論家グービッツ，更には26年の音楽評論家レールシュタープの文芸欄編集参画は，ドイツ最高の教養新聞としての同紙の権威を不動のものにした。当時の劇場関係者達は，公演の翌日には取るものもとりあえず，『フォス新聞』を開き文芸欄に目を走らせたのである。フランス革命に倣おうとする革命思想の挫折により，極めて現実逃避的なドイツ・ロマン主義が開花したことはよく知られているが，この時期の『フォス新聞』文芸欄の充実も，新聞本来の使命を考慮するといささか皮肉な結果であった。

ベルリンにおける二大紙寡占状態の終焉

一方，この時期のベルリンで，ささやかながら，ウンガーの果たせなかった「ベルリン第三の新聞」発行が実現する。その新聞―„Berliner Abendblätter“は，1810年10月に発行を許可され，僅かな部数で発行を開始するが，その攻撃的な紙面により，たちまち当局の厳しい検閲に晒され，翌年3月には早くも廃刊に追い込まれた。この„Berliner Abendblätter“（以下„Abendblätter“と省略）は，ジャーナリスティックな観点からは，正式なベルリン第三の新聞という以上の意味を持つものではない（1806年に，ベルリンでは日刊紙„Telegraph“が発刊されているが，その実態はナポレオン占領下における占領軍御用新聞であり，自由な言論とはかけ離れた一種のプロパガンダ紙

である)。その八つ折版体裁は粗悪であり，発行期間も僅か半年という短期間では，二大紙以上にリベラリズムを旨とした意欲的な編集姿勢も，時のジャーナリズムにさしたる影響を及ぼすには至らなかった。„Abendblätter“ は，従ってドイツ言論史の中に完全に埋没して忘れ去られたところで，何ら不思議のない一地方紙である。事実，この新聞の完全な揃いとしては，現在1セットが現存するに過ぎず，それも寄稿者であったアヒム・フォン・アルニムの勧めにより，グリム兄弟がコレクションしておいたものである[27]。そのような „Abendblätter“ を，リプリント版が広く普及するまでの有名な存在にしたのは，一にも二にも発行者ハインリッヒ・フォン・クライストの後世での名声といえよう。実際この新聞には，アルニムの他にもブレンターノ，フーケー，シュライエルマッヒァー等が原稿を寄せており，先述したジャーナリズム上の無力性とはうらはらに，発行者自身の美学エッセイ『マリオネット劇場について』が掲載されるなど，特筆すべき教養性・文学性が認められる。しかし，独自の政治的な発言をあまねく禁止され，二大紙からの転載記事しか掲載出来なくなった同紙の末路には，廃刊から半年後に自らの命を絶ったクライスト自身の，政治的にも，また文学的にも孤立無縁となった絶望的状況が投影されることだろう。

だがここで指摘しておきたいことは，四面楚歌の内に世を去った天才劇作家という「神話」の形成には，『フォス新聞』も少なからず関与していたという事実である。即ち，„Abendblätter“ は，体制側の報道機関として『フォス新聞』を殊更執拗に批判し，当時既に主要な寄稿者となっていたレールシュタープが，国立劇場監督イフラントより賄賂を受け取り劇評に手心を加えていると書き立てたのである。このスキャンダルに憤った『フォス新聞』の当局への積極的な働きかけが，その後の „Abendblätter“ に対する過剰な検閲に影響した点は否定し得ない。蓋し，終始リベラルな編集姿勢を旨としてい

---

[27] Ludwig von Salomon: Geschichte des Deutschen Zeitungswesens. Erster Band, Oldenburg/Leipzig 1906, S. 189-190.

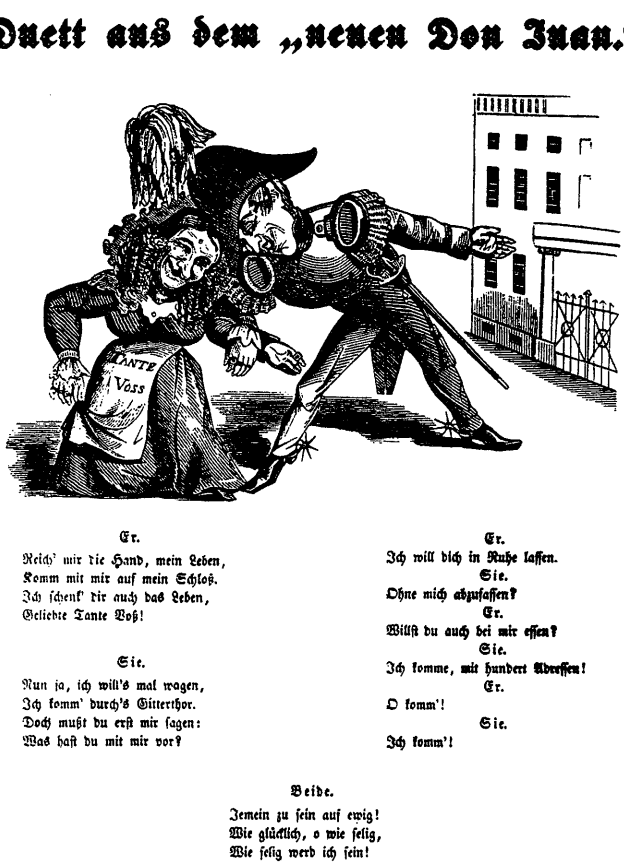
た『フォス新聞』も，競争紙の出現には，当局を介して容赦ない圧力をかけるのが常であった。1700年代初頭に繰り広げられた，新聞発行認可を巡るローレンツとリューディガーの熾烈な抗争は既に述べたが，1735年に，書籍商ホーデが„Potzdamischer Staats-und gelehrte Mercurius“を創刊した際のリューディガーの異議申立ても執拗を極めた。彼は，「平和時には多大な赤字まで出して発行してきた新聞」が，「ホーデの如き本屋がほぼ同体裁の新聞を発行すること」により莫大な経営的損失を被る（リューディガーは発行認可料として，毎年200ターラーを国庫に収めていた）と主張し，「この新聞には自分が発行認可を受けた内容と同様の，世間の出来事が報じられている」と訴えたのである。その結果，„Mercurius“は37年に発行禁止となり，ホーデは新聞発行を，フリードリヒ大王が現れる40年まで，尚3年間思い止まらねばならなかった[28]。

ここには，主観的論評を禁じられていた当時のジャーナリズムにとって，「ひとつの事件を報道するには原則的にひとつの新聞で充分」という未成熟な姿勢が垣間見られる。実際，『フォス新聞』も『シュペナー新聞』もその報道内容に大差は見られず，あまつさえ，1806年の対ナポレオン戦争時にはこぞってなりふり構わぬ読者の戦意発揚に務めながら，フランス軍にベルリン入城を許すや否や，敗戦に伴う国土の荒廃などには目もくれず，両紙はたちまち占領軍の御用広報誌と成り果てた。占領軍発令に対する両紙の迅速な報道振りには，司令部のフランス軍将校までも驚きを隠さなかったほどである[29]。19世紀ヨーロッパ最大の事件のひとつであるナポレオンの政治・軍事行動に関しては，その即位からロシア遠征失敗・失脚に至るまで，二大紙は従って終始正確な報道を行なうことが出来ず，文芸欄の充実とはうらはらに，新

---

[28] „Mercurius“は従って，『ベルリン政治教養新報』（『シュペナー新聞』）の直系の母体紙である。／Buchholz, S. 25/26.

[29] Salomon: Geschichte des Deutschen Zeitungswesens, 2. Bd., Oldenburg/Leipzig 1906, S. 181.



図版III 『フォス新聞』と当局との癒着を風刺したカリカチュア。
1849年の〝Kladderadatsch〟より

聞本来の機能を十全に果たしたとは到底いい難いのである。

しかし，ナポレオン後『フォス新聞』は，検閲強化の遺産である教養記事並びに外事報道を前面に押し出し，飛躍的な発展を遂げる。1823年に，日曜を除く文字通りの日刊を達成した同新聞は，ドイツ連邦内の主たる都市は勿論のこと，外国ではロンドン，パリ，ウィーン，ローマ，ブリュッセル，ワ

ルシャワ，コペンハーゲンなどの各都市に特派員を派遣した。30年代には，社主クリスティアン・フリードリヒと編集主幹レールシュタープの指揮のもと，新聞は度々検閲の干渉を受けながらも有力紙としての紙質を高め，42年に『シュペナー新聞』が保守反動化路線を歩み始めると，唯一のリベラル紙として読者の共感を呼び，24,000部の発行部数を誇るドイツ最大の新聞へと成長するのである。更に48年の三月革命の際には，レールシュタープの尽力により検閲が廃止され，新聞業界における言論の自由がついに実現する[30]。3月20日の『フォス新聞』67号は「歓喜の号外」（„Extrablatt der Freude“）と題され，以下の如く検閲制度廃止の喜びを語っている。

> 「新聞は自由となった！　この素晴らしき権利を手中にしたまさにこの時，われわれは喜喜たる声を放とうではないか。（中略）今や平和と喜びの歓声が，金色の光の如く，かつて燃え盛る光条に呼び寄せられた暗雲を，またもやみるみる切り裂いたのだ。天は再び晴れたのだ！」[31]

三月革命は，従ってベルリンジャーナリズムにとって，また『フォス新聞』にとっても過去最大の転回点であったといえる。この時より，新聞には国内政治報道の自由が認められ，それまでの官報的な事実限定報道から，世論形成という本来の任務が新聞に備わるからである。しかし，『フォス新聞』は，いつまでも歓喜の声をあげ続けている訳にはいかなかった。「報道の自由」とは，とりもなおさず「新聞発行の自由」を意味し，48年を境にベルリンには続々と新たな新聞が名乗りを上げたからである。その内めぼしいものとして

---

[30] 市民と軍隊との衝突という三月革命のピークを迎えた48年3月19日，レールシュタープは単身プロシア王フリードリヒⅣ世に謁見し，後刻の事態打開に向けた王と市民代表者達との会合を取り持った。／Buchholz, S. 122.

[31] Vossische Zeitung, 1848 Nr. 67.

は，革命精神を更に推し進めた革新紙 „Zeitungshalle“，ドイツ最初の恒常的な風刺紙 „Kladderadatsch“（週刊），市民代表により設立された穏健リベラル的傾向の „National-Zeitung“，同傾向ながら編集者が単独であったためによりメッセージ性の強かった „Die Locomotive“，そして一方反動的内容で対抗した „Neue Preußische Zeitung“（通称 „Kreuz-Zeitung“）などが挙げられよう。『フォス新聞』は，このジャーナリズム変革の中で「伝統紙」として，„Kreuzzeitung“ と共に反動的な論陣を張るまでになった（図版III参照）。教養記事で言論界の筆頭に立ち，加えて寡占状態を維持し続けてきた同紙は，ここでも巧妙に立ち振る舞い，堰を切ったようにリベラリズムへと傾倒する緒新聞に業を煮やした当局が，48年末とうとう „Locomotive“ や „Kladderadatsch“ や „Zeitungshalle“ など8紙を発行禁止処分にする中，筆頭新聞としての地位を守り続けたのである。だが，同紙の「中興の祖」クリスティアン・フリードリヒ・レッシングが間もなく世を去り，『フォス新聞』は後半生の新たな時代を迎えることとなる。奇しくも同年，父親がライプチヒで紙問屋を営むレオポルト・ウルシュタインが，ベルリンに進出して小さな紙問屋を開店する。自分の創業する零細出版社が雲の上の大新聞である『フォス新聞』の命運を後に握ることになろうとは，この時点の彼には夢想だにしなかったに違いない。

„Die Vossische Zeitung“
── die erste Gelehrte Zeitung im deutschen Kreis ──
1.Teil

Masafumi SUZUKI

In Deutschland, wo nach der Erfindung des Typendrucks von Gutenberg die ersten gedruckten Zeitungen in der Welt herausgegeben wurden, galt „Die Vossische Zeitung“ in Berlin von Anfang bis Ende als eine besonders einflußreiche. Wenn wir deren Geschichte nachgehen, erreichen wir eine der ältesten gedruckten deutschen Zeitungen, die sogenannte „Frischmann-Zeitung“ von 1617, die der damalige preußische Botenmeister Christoph Frischmann wöchentlich viermal herausgab. (Als erste deutsche Zeitung betrachtet man jetzt im allgemeinen die „Avisa Relation oder Zeitung“ in Wolfenbüttel von 1605.) In Betracht der Größe der Stadt wäre es bemerkenswert, daß Berlin in der Herausgabe der Zeitung Hamburg oder Frankfurt, die damals viel größer waren, um einige Jahre voranging. Die „Frischmann-Zeitung“ übernahm nach dem Tod des Herausgebers sein Bruder Veit, dann im Jahr 1661 ihr Buchdrucker—der im damaligen Berlin einzige—Georg Runge. Die Zeitung wurde dabei zum ersten Mal auf den offizielen Namen „Berlinische Einkommende Ordinari und Postzeitungen“ getauft. Bei der Übernahme von Runge erlebte die Zeitung einen Wendepunkt, denn dadurch ging sie vom Amt in die Hände der allgemeinen Bürger über, und im strengen Sinne begann erst jetzt die Geschichte des echten Berliner Journalismus. Aber wenn die bürgerliche Zeitung auch endlich hier entstand, war es ihr durch die schonungslose Zensur überhaupt unmöglich, in Bezug auf die preußische innere Politik kein Blatt vor den Mund zu nehmen. Die

Zensur-Probleme bestanden mehr oder weniger bis zur Märzrevolution von 1848 fest, und man brauchte überhaupt ein besonderes Zeitungsprivileg der Behörde, um eine Zeitung herausgeben zu können. Deshalb existierten bis 1848 in Berlin fast immer nur zwei Zeitungen—die „Vossische“ und die 1740 gegründete „Spernersche“—.

Die strenge Zensur übte auf die Zeitung auch einen anderen Einfluß aus: Ihre Redaktion legte den Schwerpunkt auf die Auslandspolitik und das Feuilleton. Die „Vossische Zeitung“ ging 1704 von der Familie Runge in den Besitz Johann Lorenz‘, auch Berliner Buchdrucker, dann 1712 an dessen Konkurrenz, Johann Andreas Rüdiger, dessen Schwiegersohn, der 1751 die Zeitung übernahm, Christian Friedrich Voss war. (Vor ihm wurde sie „Königlich privilegirte Berlinische Zeitung“ gennant.) In dieser Entwicklung der Zeitung während der Zensur-Zeit beteiligten sich die kulturell höchsttalentierten Personen einer nach dem andern an der Redaktion, damit die Zeitung zu einer erstklassigen Gelehrten Zeitung gedeihen möge. Als solchen Redakteur für das Feuilleton „Gelehrte Sachen“ sollte man unter anderen den Namen Gotthold Ephraim Lessing angeben. Er redigierte die Zeitung als Nachfolger von Christlob Myrius, der in der Zeitung erstmals regelmäßig den gelehrten Artikel brachte, nur von 1751 bis 1755. Aber die nur auf seinen eigenen Sinn für Ästhetik gestützte entschiedene Haltung zeigte lange danach ein Muster für die Rezension, und schuf die Grundlage der „Gelehrten Sachen“ in der „Vossischen Zeitung“. Die ihm folgenden Redakteure —Karl Philipp Moritz, Friedrich Wilhelm Gubitz, Ludwig Rellstab usw.— waren auch jeder einzelne eine Autorität im damaligen Berliner kulturellen Leben. Für die praktische Verwaltung der Zeitung ist Lessing auch von großer Bedeutung: Weil sein Bruder mit der Tochter Voss‘ verheiratet war, ging die Zeitung später (1795) in Besitz der Familie Lessing über. Diese

Situation dauerte bis zur Geschäftsübernahme durch den Ullstein-Verlag am Anfang des 20. Jahrhunderts, also länger als 110 Jahre, und trug dazu nicht wenig bei, die politische sowie kulturelle Unabhängigkeit der Zeitung zu erhalten.